

以上述べてきたような「代々の教会」と、私たちが大切にしている使信とを、どうやって維持したらよいのでしょうか。そのために、私たちは、今よりもっと聖書を用いなければならないと思います。「聖書をもっと用いる」ということで、私は、「聖書の中から新しい知識を得、その新しい釈義を得る」という素晴らしい出来事以上のことを言おうとしています。「私たちが教会を建てる時、そうしなければ、聖書は何の役にも立たない」という聖書の使い方があるのです。そういう使い方を目指して、私は「聖書をもっと用いる」と言っています。今のままでは、聖書よりも教会について、私たちは考えて行くようになるでしょう。そして、聖書と教会のことばかり考えて、キリストについて考えなくなって行くでしょう。それは結局、「ローマ・カトリック教会至上主義」と、何が違うのでしょうか。

今、多くの人は、聖書を自分自身の物語として読んでいません。それで、素敵な説教者が何か語った時に、それが福音なのか、そうでないのかも、判別できなくなっています。代々の教会が有する本当の力は、その働きの積み重ねにあるわけではありません。そうではなくて、その信仰の質の中にあるのです。ひとり、聖書を本当によく知っている人がいれば、教会は力を得ます。その人の貢献は、聖書をよく知らない多くの働き手の一群以上に、教会にとって価値あるものとなるのです。

どうぞ、説教者に聞いてみて下さい。どの説教者も、その説教の力はどこにあるか、よく知っているはずなのです。私たちに無力さが感じられるとしたら、それは「私たちの仕事の積み重ねの中」に感じられるのではないはずです。そうではなくて「私たちの宗教の質の中」に、その無力さは感じられるものなのです。

私たちの宗教は、愛国心とは違います。愛国心は、自己犠牲を求めてきます。「国のために死ね」と、愛国心は求めてくるのです。もし私たちの宗教もそう求めるものであれば、あるは、もう少し成果を誇ることもできたかもしれません。しかし、私たちの宗教は、そうしたことを求めないのです。もちろん、私たちの宗教も、殉教と犠牲を否定してはいません。多くの命が教会のために捧げられています。しかし、どうでしょうか。それは「代々の教会」のために捧げられているのでしょうか。

現に私たちは「唯一の・聖なる・公同の（カトリックである）・使徒から継承されている、救いの御言葉から生まれた代々の教会」というような輝かしい

教会のイメージに、心を奪われているのかもしれませんが。もしそうなら、そこにこそ現下の危険があります。私たちはその危険から距離を取らなければなりません。世間の奴隷や使用人になってはいけません。私たちは世間に奉仕すべき者ですが、世間に追従する者ではないのです。御言葉を道具として使いまわすようなことをしてはいけませんし、御言葉を世界の一部であるかのように取り扱ってはいけないのです。

私たちはピューリタンに由来する自由教会諸派のメンバーです。この「自由教会」という立場について、「これこそ宗教に現れた民主主義だ」とだけ理解しているとしたら、それは問題です。そうした考え方は「エラストゥス主義（ツウィングリ派の神学者エラストゥスが主張した立場。国家は教会内部にも支配権を及ぼしている、と主張する）」の最新の姿のひとつなのです。この立場によって、自由教会諸派は、実に微妙な苦しみに悩まされるようになっていきます。

古いタイプの「エラストゥス主義」においては、教会は国家の宗教的な部分に過ぎないと見做されていました。今、自由主義教会諸派は、そうした立場に束縛されることはありません。そうした立場に対抗して、自由教会諸派は立ち上がり、現在に至ったのです。この古いタイプの「エラストゥス主義」には、もうほとんど活力が残されていません。もちろん、この立場こそが「国教会」というものの根になっていますが、その根はもう、実に空疎なものになっており、それを時代遅れのものとしています。

しかし、今、新しいタイプの「エラストゥス主義」が生まれています。その立場は「教会を建てるのは国家ではない」した上で、しかし「教会を建てあげるのは実践である」とするのです。法的に「教会」と認定されていない時点で展開されるキリスト者の具体的実践こそが、教会を教会たらしめる、と言うのです。つまり、通常の「国教会」は議会等による認証を経て成立するのですが、そうした手続きをまったく踏んでいないのに「国教会的な原理」に立ってしまう教会があり得るということです。そうして、新しい形で「国教会的な原理」によって傷んでしまった教会があり得る、ということです。議会によって認証された国教会制度に抵抗し勝利した自由教会諸派が、今度はまた別の形の「国教会主義」に屈服させられてしまう、ということがあり得ます。「議会によって認証された国教会」は、自由教会諸派にとって、今や「最も悩ましい敵」ではなくなりました。むしろ今は、「議会が当然視しているタイプの宗教」こそが「最も恐ろしい敵」となっているのかもしれません。

教会はこれから、教団・教派の問題を語ることが無くなって、世間の事柄・社会生活を多く語る場になるかもしれません。かつて「日曜日の礼拝」について議論していた教会は、これから「社会活動」について多くを議論するようになるかもしれません。これからの教会は、世界で流行っている事柄に追いついた時にこそ、本当にうれしく思う、そんな団体となるかもしれません。その時、「教会が語るキリストは、“きわめて人間的”で民主主義的であるからこそ、受け入れられるのだ」とされるようになるかもしれません。あるいは、キリストへの礼拝が「正しい」ものだから、人々はそれを受け入れる、ということになるかもしれません。

そうして、教会はこの世界によって建て上げられるものになってしまいます。「この世界」というものは、国家によって作られるとは限りません。つまり、国家とはかかわりなく「この世界」によって教会が建て上げられて行くということも、当然起こり得るわけです。

「この世界」に打ち勝つような明確なメッセージを教会が打ち出さなくなる時、そうしたことが起こり得ます。教会が自分自身を「この世界」によって建てられたものとして取り扱い、自らを「この世界」の神聖な部分に過ぎないと思う時、そうしたことが起こるのです。

「この世界」が効率よく回るために奉仕するのが教会だと考えてしまい、神を礼拝し神の栄光を表し神と交わるといった目的を見失う時、そうしたことが起こります。「この世界との繋がりとは、その根本において、実は神秘の内にあるのだ」ということを教会が忘れてしまった時、そうしたことが起こります。

教会が保持している福音について、「それは人間性の霊的本能の完成形態に過ぎない」と考え、「それは新しい創造なのだ」と考え無くなる時、教会は「この世界」によって建つものとなります。教会において語られる御言葉が「福音による信仰以外の信仰を寄せ集めたものの最善の姿」に過ぎないとされる時、教会は「この世界」によって建つものとなります。

「諸宗教が平等に寄り集まる法廷のような場で、教会が行う最終弁論」が御言葉なのだと考える時、そうしたことが起こるのです。「福音による信仰を、他の信仰・他の社会運動と結び合わせて一つにできるところにこそ、教会の最も素晴らしい点がある」ということを基本理念として掲げてしまい、その理念に夢中になって、「福音による信仰は、他の信仰との違いを際立たせ、他を圧倒する」ということを基本理念とすることを止めてしまう時、そうしたことが起こるのです。

一般的な意味での「心」と「理性」と「喝采」をひとまとめにして封をしたようなものを、あらゆるものを措いてでも確保しよう、とするとき、教会は「この世界」によって建て上げられるものとなるのです。

神の恩恵によって、「キリスト教」はキリスト者のものとなります。神の恩恵によって、「キリスト教」は、他の信仰との違いをはっきりと示します。人間の本能から「キリスト教」を引出し・引き上げるのではなく、人間の本能の上に「キリスト教」を降ろしてくるのが、神の恩恵です。従順を徹底した姿で・強い共感的な理解と同様の真理性をもって、人間の内なる従順を探し出そうとするのが、神の恩恵なのです。

以上、私が語ろうとしてきたことは、あるいは「合理主義的な国教会主義」と言えるものかもしれません。実に教会は、特に「民主主義」に屈服してしまっています。教会が「聖なる御言葉」を忘れてしまおうとする誘惑にかられ、「聖なる御言葉」を剪定（せんてい）してしまっていて、それをこの世界・この時代と文化の理想の幸いなものの一つにまで矮小化する時、こうした屈服が教会を覆うのです。

教会は今、ある種の社会主義の害毒に曝（さら）されています。そして教会は今、「宗教的な人々の集まり」ではなくなり、「宗教に染まった民主主義者の団体」となってしまいました。その結果、今後もし教会が生き残ったとしても、それはもはや「公共サービスの一部門」か「社会的に高い貢献を示す何か」に過ぎないものになってしまうのです。その際、牧師・神父・司祭はもはや、確かに「国家公務員」ではないけれども、しかし単なる「公僕」となってしまいます。確かに「市民の公僕」ではないかもしれませんが。しかし「社会の公僕」になってしまいます。「人民の牧師」となってしまっていて「福音の公使・聖職者〔ミニスター〕」であることを止めてしまいます。人類の博愛精神の一部として生きるものとなり、神聖なる御言葉の預言者であることを止めてしまいます。神の恩恵と御旨は人々へと向かっているのですが、その恩恵と御旨の一部として生きることを措いて、人々の訴訟・権利請願の弁護者となることを優先するようになります。数々の理想への認証を求め、数々の不満を聞き、数々の計画を実行する、古代ローマの「護民官」のような指導者になってしまうのです。

牧師・神父・司祭たちは、あるいは社会運動のチャンピオンになるかもしれませんが。しかしその時、この自然の世界を超えた領域の営みを代表することを止めてしまい、聖なる救いの出来事を伝える使徒であることを止めてしまうの

です。

以上のような牧師・神父・司祭たちの影響力・価値は、世間からの支持を失う時、きれいに消え去ってしまいます。それで、以上のような牧師・神父・司祭たちは、世間の人々を神の名をもって譴責（けんせき）することをためらうようになるのです。世間の人々に悔い改めを迫ることができなくなってしまう——実に、悔い改めこそが神の国そのものであるのに、です。（教会は民主主義と折り合いが悪いのですが、その深い原因は、教会が悔い改めを迫ることにこそ、あるのです。）人間の本性（ほんせい）に対して暴力的に迫る要求は、どんなものでも、語ることが憚（はばか）られるようになります。人々の間に火事のように燃え広がる欲求に影を差すようなことは、もはや、やりにくい事柄になってしまうのです。いつも「人々の共感と同情を得るような訴えかけをするように」という誘惑に付きまといわれ、「人々の良心に訴えかけること」は二の次になってしまいます。人々の支持を基盤として、教会はその影響力を維持するようになります。つまり、そうして得られた影響力をもって、善を行うための梃（てこ）にしようとし始めることになるのです。

福音について、牧師・神父・司祭たちが、完全に・明瞭に・詳細に理解し、その通り実践していたら、今あるいくつもの慈善活動の計画は、実行できなくなるかもしれません。計画には資金が必ず必要なのです。牧師・神父・司祭たちは、その資金の源について知らないはずがないのです。ですから、牧師・神父・司祭たちは、世間的な好感度と無関係なままにいるわけにはいきません。どうしても、自分たちが保持している福音を一般受けするものにしなければならない。そうした圧力にさらされ続けている牧師・神父・司祭たちは、福音を世俗化するところまで、その努力を続けてしまうことになるのです。